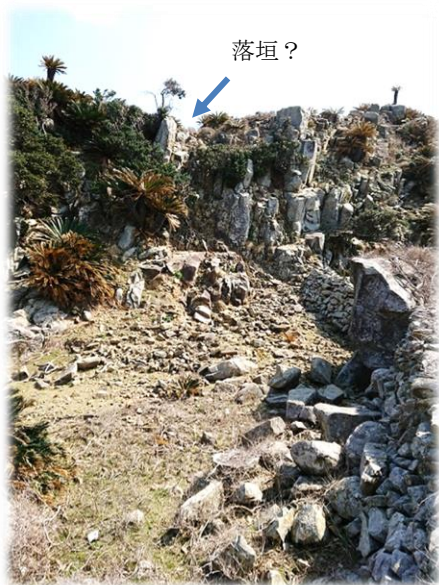


江戸時代、鹿害を防ぐために鹿・民家・田畑を住み分けていた種子島の人々

西之表市史編集副委員長 鮫嶋 安豊

およそ200年前、種子島の老人間に伝わっていた話をまとめた『新古見聞記』という書物がある。他の文献には見られない貴重な記事が多く掲載されている。その中の「鹿と人々との共生」を語る記事を紹介し、歴史を振り返ってみたい。江戸時代、種子島家は「馬毛島に一町歩の田圃をつくりたい」と薩摩藩に願書を提出し、許可がおりた。早速、開田し、苗を植え、見事に青々と生長するかに見えた。その後、潮害と鹿害が深刻となり、収穫できても小米(こごめ)で用をなさない。藩に実状を報告すると、「鹿を皆殺しにするべし」との達示が下った。

雄鹿の袋角からできる鹿茸^{ろくじょう}は、古くから漢方薬として万能薬である。当時、不治の病といわれていた「天然痘」の治療薬は、「鹿茸^{ろくじょう}」である。鹿は薬、絶滅すれば島民の命が救えない。さらに、安城村立山で毎年行われていた「鹿狩り」行事は種子島を二分した伝統行事でもあった。共存共生の策はないか?と憂慮したことが伺える。『新古見聞記』に「東西に落垣^{おとしがき}を作り、一方に鹿を籠める」とある。「落垣」とは急崖の一ヶ所に鹿を籠めるための出入り口(落とし)の石垣のこと。馬毛島には壱泊小屋・池田小屋・住吉小屋・洲之崎小屋・能野小屋などがあったが、各小屋の周囲は石垣や竹・木・ソテツの群落で取り囲み、「鹿垣^{しかがき}」とし、さらに「田畠の周囲は長い盛土を巡らした」と記される。鹿は「鹿溜まり場」に、「田畠の周囲は土塁」、「人家の廻りは鹿垣」を設けていたことが分かる。特に馬毛島は東西に急崖が発達し、海岸の低地に鹿を籠めるのに非常に便利な地形で、自然環境と上手く調和を図っている。これまで、種子島ではこのような「人と鹿と田畑」の住み分けについての報告例はなく、貴重な発見となった。生物の多様性の維持という21世紀の地球規模課題で考えると、野生動物と人との共生は避けて通れないテーマである。(了)



落垣?

鹿垣か?

左右いずれかに鹿を籠める



葉山漁港(壱泊小屋)
集落は鹿垣(ソテツ・雑木など)、後背部は落垣
(写真は『種子島の民俗II』より)



西之表市史編さんだより

自然部会

マツカサガイ? それともニセマツカサガイ?

尾形 之善 (種子島開発総合センター)

西之表市現和のため池下流に大きな二枚貝がいる。この貝を入手したときにマツカサガイと同定したが、念のため貝殻を鹿児島県の貝の研究者、行田義三氏に送付して同定を依頼した。その結果、ニセマツカサガイと同定され、行田氏は県のRDB『鹿児島県の絶滅のおそれのある野生動植物』に「種子島が南限」として準絶滅危惧種にランクづけされた。

数年前東京の貝の研究者よりこの貝を見てみたいとの連絡をいただき、最初の産地とは別の場所(故花木計治氏ご教示)で採集する機会を得たので、その貝数個を送付した。

同定結果はニセマツカサガイではなさそうで、確実な同定には幼生を観察してみたいということであった。繁殖期の六月、生貝を数個送付。無事生きてままた到着したものの、残念ながらすべての貝から幼生はまったく見つからなかったということであった。

その後、行田氏に送付したときの貝の採集地が判明し(迫田孝幸氏ご教示)、新たにそこで採集した貝殻を送付したところ、今度はマツカサガイでもなさそうに見えてきたと言われ、未だ種名を確定するに至っていない。いずれにしても絶滅危惧種であり、種子島が南限であることには違いない。地元では知る人ぞ知る貝で、病人の滋養強壮のため食されることがあるそうだが、保護されるべき貝であることも確かである。



用水路で見つかったマツカサガイ?

『西之表市史』の校正を行っています

令和元年度から本格始動した「西之表市史編さん事業」が、作業の大詰めを迎えています。市史の発行は令和6年3月を予定しており、現在原稿の校正を行っているところです。

市史の規格を改めてご紹介します。

名称:『西之表市史』

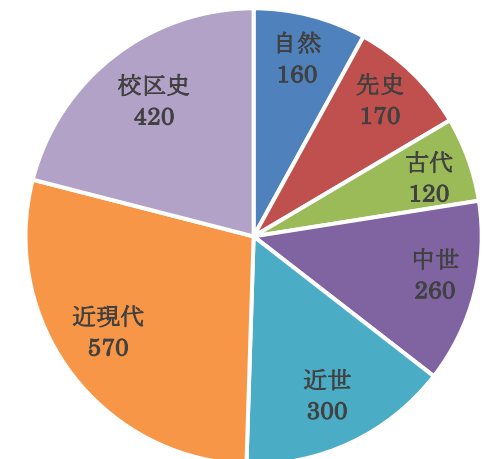
判型: B5判の上製本。原則タテ書き。

約1,000頁×2冊(上巻・下巻)の計2,000頁。

本文モノクロ、カラー口絵が16頁×2冊。

1頁の文字数が1,288字(28字×23行×2段)。

2,000頁の配分案は右のとおり。



自然や歴史、各校区についてまとめた、本市はじめての自治体史となります。市史の完成まで温かく見守っていただくと幸いです。2頁では、先史部会、古代部会の部会長の先生に市史のみどころを語ってもらっていますので、是非ご覧ください。

先史部会

先史編のみどころ

先史部会長 堂込 秀人（鹿児島県立埋蔵文化財センター）

通史は、これまでの発掘調査の成果や新しい研究方法によって、日々更新されていく種子島の歴史について、最も新しい情報で描いたものと自負しています。3万5千年を越える前の旧石器時代から人類が生活し、列島で土器が出現してまもなく1万4千年前に土器が使用され、1万1千年前から続く豊かな縄文早期文化は7千3百年前の鬼界カルデラの大噴火で壊滅しました。その後約200年後に人類が移入して、九州島や南島とネットワークを持ちながら、縄文時代後期後半からは個性的な縄文文化を形成し、縄文晩期から弥生時代には南島産貝交易に関わり、古墳時代には独自の貝装飾を行う文化が生まれます。このように海洋的で個性的な文化が種子島の先史時代の特色といえるでしょう。

新しい研究方法の例として、特論の中で人骨の分析ではミトコンドリアDNA分析や次世代シーケンサーを使用した核DNA分析によって、種子島の古人骨の形質や系譜を述べています（竹中）。土器の圧痕調査では圧痕レプリカ法から、土器の中にある潜在圧痕を狙ってのX線CT装置を用いた分析も進み、これらにより縄文時代の植物の利用が明らかにされつつあります（真邊）。

また、広く日本列島の縄文文化の中の種子島をとらえるために、特に石製装身具から論じました（水ノ江）。南島との交流については、縄文時代から古代までを概観し（木下）、種子島の発掘調査で出土した動物骨についてもまとめました（中園）。

いろんな視点で、面白く読んでいただけるものと思います。



馬毛島からみた鬼界カルデラ（硫黄島・竹島）

写真、資料のご提供 ありがとうございます！

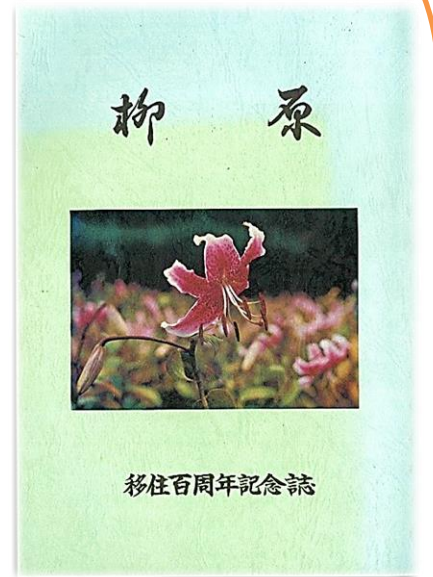


←種子島・屋久島
産業・観光案内
(中村宜也さま)

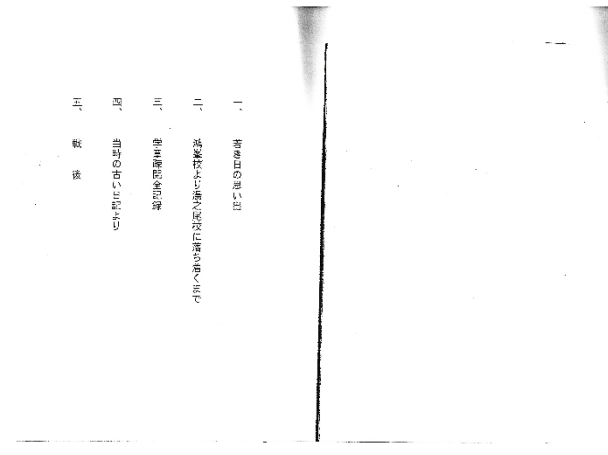
昭和28年発行。
当時の観光地や旅館、回漕店
が掲載されています。

柳原移住百周年記念誌→
(南重徳さま、南正樹さま)

昭和61年発行。移住当時
の状況、その後の生活の移
り変わり等が詳しくまと
められています。



移住百周年記念誌



鴻峯小疎開体験記
(沖吉富寛さま)

戦時中鴻峯小に赴任しており、引率者として一緒に
疎開した先生の体験記です。



各種イベントの写真
(中原康信さま)

出初式での幼年消防クラブ、伊関小新校舎落成記念祝賀
会で披露された柳原の新地節の写真です。
中原さまには多くの写真をご提供いただきました。

古代部会

古代編のみどころ

古代部会長 永山 修一（ラ・サール学園非常勤職員）

天保改革を推進した調所広郷の時代にまとめられた『調所氏家譜』の中に天喜二年（1054）二月二十七日付「大宰府符写」という史料が見えます。これは、大宰府が大隅国内8郡のすべての神々に位を1階上昇させることを命じたものです。大隅国内すべての神名があげられていたはずですが、途中からしか残っておらず、始羅郡3神、肝属郡49神、馭謨郡13神、熊毛郡30神の神名が見えています。

熊毛郡30神は、11世紀の半ば頃、種子島で祀られていた神々です。この命令の先例としてあげられている長徳三年(997)の命令は、奄美島人による大宰府管内諸国襲撃事件への対応として神々に祈るために行われたものなので、天喜二年頃にも同じような襲撃事件が起こっていた可能性があります。

熊毛郡30神のうち、大佐吉明神は西之表市上西の大崎にある大崎神社につながると考えられ、岩尾龍興・川崎晃稔両氏が1968年にまとめた「浦田神社及び宝物」(『南島民俗』6号)によれば、笹明神は同市国上の浦田神社の古名であるともされています。半世紀以上前にまとめられた研究の上に立って、市史をまとめていくことができました。現在、古代史を扱う第三編は校正を行っています。完成までもうしばらくお待ちください。



大崎神社（大佐吉明神）



浦田神社（笹明神）

市史編さん事業の経過（R5.4月以降）

- 4月14日 鉄砲伝来史跡巡見
- 5月10日 井元家資料受入
- 5月13日～15日 近世部会調査対応
- 5月15日～17日 近世部会調査対応
- 5月25日～26日 下野敏見氏資料の梱包、搬出
- 5月29日 自然部会 貝類調査
- 6月1日 第1回市史編集委員会
- 7月9日 横山盆踊り視察
- 9月5日 柳原移住百周年記念誌借用
- 9月19日、20日 下野敏見氏資料の梱包、搬出
- 9月25日 編さんだより第13号発行

鉄砲伝来480周年記念講演会

「癸卯八巡の縁」

10月21日（土）
13：00～16：30

市民会館ホール 参加無料・予約不要！

- 講演1 「鉄砲伝来と遣明船」
岡本 真（東京大学史料編纂所准教授）
- 講演2 「硝石（塩硝）とは何か—我が国の硝石製造法とその歴史—」
野澤 直美（日本薬科大学客員教授）
- 講演3 「種子島鉄砲鍛冶師系譜と国内への伝播—赤尾木の職人町を俯瞰する—」
鮫嶋 安豊（前西之表市立図書館長）

